Ⓐ

小　論　文

コース	ページ	解答用紙枚数	時　間
教育実践コース 心理学・幼児教育コース 人文科学コース	1～10	1枚	120分
特別支援・生活科学コース	11～19	1枚	120分

学　力　検　査

コース	教　科	試　験　科　目	ページ	解答用紙枚数	時　間
人文科学コース	英　語	コミュニケーション英語Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅱ・コミュニケーション英語Ⅲ・英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ	20～27	4枚	120分
数理自然科学コース	数　学	数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・B	28～32	5枚	120分
人文科学コース	国　語	国語総合・現代文B・古典B	33～46	3枚	120分

(46ページから逆に一～十四)

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまでは，この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は46ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には，監督者に申し出ること。
3. **解答**はそれぞれ指定の解答用紙に**横書き**で記入すること(国語は除く)。
4. 解答用紙の指定欄には必ず**受験番号**を記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

問題訂正

小論文

（教育実践コース，心理学・幼児教育コース，人文科学コース）

訂正箇所	６ページ　７行目
誤	心理学著
正	心理学者

教育実践コース，心理学・幼児教育コース，人文科学コース

（注意）・解答は指定された解答欄に横書きで記入し，字数は指定を超えないこと。

・解答欄は1行が20字で，全部で1200字(60行)となっている。

・解答の際，句読点，引用符，カッコなどはいずれも1字に数える。ただし，行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

次頁以下の＜資料＞は，ブレイディみかこ著『他者の靴を履く―アナーキック・エンパシーのすすめ』(文藝春秋，2021年)の中の一部である(ただし出題にあたり原文の一部を変えている)。この文章を読んで，以下の**問1**～**問3**に答えなさい。

問1　下線部①「エンパシーは「善」ではないというアンチ論」について，資料の内容を200字以内で説明しなさい。

問2　下線部②「「belonging」の感覚に強くはまっていればいるだけ，他者の靴は履けない」とはどのようなことなのか，あなたの経験，もしくはニュースや本などで見聞きしたことを例に挙げて，400字以内で説明しなさい。

問3　著者によるエンパシーとシンパシーの区別を踏まえて，あなたがこれから学びたいと思う学問分野，もしくは将来就きたいと思う職業において，この2つを混同することがどんな問題を引き起こすか，または，この2つの違いをしっかり認識し，エンパシーを強く意識することがどのような意味を持つか，あなたの考えを600字以内で述べなさい。

＜資　料＞

わたしの息子が英国のブライトン＆ホーヴ市にある公立中学校に通い始めた頃のことだ。

英国の中学校には「シティズンシップ教育」というカリキュラムがある。息子の学校では「ライフ・スキルズ」という授業の中にそれが組み込まれていて，議会政治についての基本的なことや自由の概念，法の本質，司法制度，市民活動などを学ぶのだが，その科目のテストで，「エンパシーとは何か」という問題が出たという。

息子は「自分で誰かの靴を履いてみること」と答えたらしい。「To put yourself in someone's shoes（誰かの靴を履いてみること）」は英語の定型表現である。もしかしたら，息子が思いついたわけではなく，先生が授業中にエンパシーという言葉を説明するのにこの表現を使ったのかもしれない。

「エンパシー」という言葉を聞いて，わたしが思い出したのは「シンパシー」だった。正確には，「エンパシーとシンパシーの違い」である。

わたしのように成人してから英国で語学学校に通って英語検定試験を受けた人はよく知っていると思うが，「エンパシーとシンパシーの意味の違い」は授業で必ず教えられることの一つだ。エンパシーとシンパシーは言葉の響き自体が似ているし，英国人でも意味の違いをきちんと説明できる人は少ない（というか，みんな微妙に違うことを言ったりする）。だから，英語検定試験ではいわゆる「ひっかけ問題」の一つとして出題されることがあるのだ。

とはいえ，わたしが語学学校に通ったのはもう二十数年前のことなので，すっかり忘れてしまった二つの言葉の意味の違いをもう一度，英英辞書で確認してみることにした。

エンパシー（empathy）…他者の感情や経験などを理解する能力

シンパシー（sympathy）…
1. 誰かをかわいそうだと思う感情，誰かの問題を理解して気にかけていることを示すこと
2. ある考え，理念，組織などへの支持や同意を示す行為
3. 同じような意見や関心を持っている人々の間の友情や理解

（『Oxford Learner's Dictionaries』のサイト oxfordlearnersdictionaries.com より）

英文は，日本語に訳したときに文法的な語順が反対になるので，エンパシーの意味の記述を英文で読んだときには，最初に来る言葉は「the ability（能力）」だ。

他方，シンパシーの意味のほうでは「the feeling（感情）」「showing（示すこと）」「the act（行為）」「friendship（友情）」「understanding（理解）」といった名詞が英文の最初に来る。

つまり，エンパシーのほうは能力だから身につけるものであり，シンパシーは感情とか行為とか友情とか理解とか，どちらかといえば人から出て来るもの，または内側から湧いてくるものだということになる。

さらにエンパシーとシンパシーの対象の定義を見ても両者の違いは明らかだ。エンパシーのほうには「他者」にかかる言葉，つまり制限や条件がない。しかし，シンパシーのほうは，かわいそうな人だったり，問題を抱える人だったり，考えや理念に支持や同意できる人とか，同じような意見や関心を持っている人とかいう制約がついている。つまり，シンパシーはかわいそうだと思う相手や共鳴する相手に対する心の動きや理解やそれに基づく行動であり，エンパシーは別にかわいそうだとも思わない相手や必ずしも同じ意見や考えを持っていない相手に対して，その人の立場だったら自分はどうだろうと想像してみる知的作業と言える。

（中略）

ひょっとして日本では「共感」という言葉は広く流通していても，その元ネタである「エンパシー」という英単語はあまり知られていないのではないか。で，実はここでもたいへん厄介な問題があり，エンパシーは「共感」という日本語に訳されるが，シンパシーも「共感」と訳すことができるのだ。シンパシーのほうには「同情」や「思いやり」，「支持」といった訳語もあり，エンパシーは「感情移入」，「自己移入」と訳されることもある。

いずれにしろ，日本語になると「エンパシー」も「シンパシー」も同じように感情的・情緒的というか，単なる「お気持ち」の問題であるような印象を与えてしまう。つまり，「身につける能力」というより，「内側から湧いてくるもの」のように聞こえるのだ。これだと，エンパシーという言葉の訳は，英英辞書とはずいぶんかけ離れたものになる。特にエンパシーの訳語に「ability（能力）」という言葉がまったく反映されていないのは奇妙だ（と同時に，なぜ日本でそうなっているのかは面白い点でもある）。

正しい言葉の意味を知る上でも，エンパシーについて書かれた本の邦訳を読んで理解する上でも，エンパシーという単語の日本語の定訳をいつまでも「共感」という表現にしておくのは問題なのではないか。近年，日本語のSNSなどで見かける「共感は危険」「共感にはもううんざり」といった論調にしても，エンパシーもシンパシーも「共感」という日本語に訳されている限り，それはいったいどっちのことを言っているのかわからない。

とは言え，本当のところ，エンパシーの意味が曖昧(あいまい)になっているのは日本だけではない。実は英語圏の国々でも，エンパシーの定義は論者によって様々に異なり，論者の数だけ定義があるなどと言われたりもする。

それでも，エンパシーにはいくつかの種類があるということは定説になっていて，大まかに言うと次のようなものだ。

❶コグニティヴ・エンパシー

日本語では「認知的」エンパシーと訳されている。米マサチューセッツ州レスリー大学の公式サイトに掲載されている「The Psychology of Emotional and Cognitive Empathy」という記事には，コグニティヴ・エンパシーは「どちらかといえばスキルのようなもの」と書かれている。さらに，心理学ではこのタイプのエンパシーは「empathic accuracy（エンパシー的な正確さ）」とも表現されると指摘した上で，「その人物がどう感じているかを含んだ他者の考えについて，より全面的で正確な知識を持つこと」という『Encyclopedia of Social Psychology』からのサラ・D・ホッジズとマイケル・W・マイヤーズの言葉を引いている。これはオックスフォード・ラーナーズ・ディクショナリーズが定義する意味と符合する。息子風にいえば「他人の靴を履いて」他者の考えや感情を想像する力であり，その能力をはかる基準は想像の正確さだと心理学の分野では定義されている。

❷エモーショナル・エンパシー

「感情的」エンパシーと訳される言葉だ。前述のサラ・D・ホッジズとマイケル・W・マイヤーズによれば，これまたいくつかに分類されるという。まず一つ目は，「他者と同じ感情を感じること」。これは，ずばり日本語で言うところの「共感」だろ

う。そして二つ目は，「他者の苦境へのリアクションとして個人が感じる苦悩」，三つ目は「他者に対する慈悲の感情」となっている。これは，オックスフォード・ラーナーズ・ディクショナリーズでいうところの「シンパシー」の意味とかなり被(かぶ)る。

❸ソマティック・エンパシー

これは，❷のエモーショナル・エンパシーで定義された二つ目の「他者の苦境へのリアクションとして個人が感じる苦悩」をさらに推し進めたもので，他者の痛みや苦しみを想像することによって自分もフィジカルにそれを感じてしまうというものだ。例えば，誰かが脚をひどく怪我したのを見て，自分の脚も痛くなるというような反応である。

❹コンパッショネイト・エンパシー

これは最近よく使われている言葉であり，他者が考えていることを想像・理解することや，他者の感情を自分も感じるといったエンパシーで完結せず，それが何らかのアクション(行為・行動)を引き起こすことだという。「compassion」もシンパシーやエンパシーと似た言葉として使われることが多いが，オックスフォード・ラーナーズ・ディクショナリーズには「苦しんでいる人々や動物に対する，強いシンパシーの情であり，彼らを助けたいと思う願望」と定義されている。

ちなみに，❷のエモーショナル・エンパシーはアフェクショネイト(情緒的)・エンパシーと呼ばれることもあり，❹のコンパッショネイト・エンパシーは「empathic concern(エンパシー的配慮)」と呼ばれることもある。このようにエンパシーの定義は様々であり，読めば読むほど「これとこれは同じだから敢えて違う言葉で括る必要ないんじゃないか」とか「これはエンパシーじゃなくてシンパシーのほうだろう」とかいう疑問が湧いてくる。ある意味，唱えたもん勝ちというか，アナーキー(注1)な言葉の定義状況とも言えるが，それもそのはずで，実はエンパシーという言葉の歴史はたいへん浅いらしい。

米誌アトランティック電子版掲載の「A Short History of Empathy」(2015年10月16日)という記事の執筆者，スーザン・ランゾーニは，エンパシーという英語の言葉

が登場したのはわずか1世紀前のことだと書いている。エンパシーは「Einfühlung」というドイツ語の訳語として編み出された言葉だったという。これを英語に直訳すれば「feeling-in」となるらしい。日本語なら「感情移入」，または「感じ入る」にでもなるだろうか。『世界大百科事典』(平凡社)では「Einfühlung」の訳語である「感情移入」を「他人や芸術作品や自然と向かいあうとき，これら対象に自分自身の感情を投射し，しかも，この感情を対象に属するものとして体験する作用をいう」と定義している。

英語圏の心理学著たちは，当初，「Einfühlung」の英訳として「animation(活き活きと描き出すこと)」「play(～のふりをする，振る舞う)」「aesthetic sympathy(美学的シンパシー)」「semblance(うわべ，見せかけ，類似)」といった言葉を使おうとしていたらしい。しかし，1908年に二人の心理学者が，「in」をギリシャ語の「em」に置き換え，「feeling」の代わりに「pathos」を使って新語を作ろうじゃないかと提案し，「empathy」という言葉が誕生した。

『世界大百科事典』による「感情移入」(Einfühlung)の解説と同じように，1900年代の時点では，英語のエンパシーも「他者の気持ちを慮(おもんぱか)る」という意味ではなかったらしい。それどころか真逆の意味で使われていて，自分の感情や気持ちを，自分の外側にあるものに投影することだった。ある物体に命を吹き込むこと，または世界に自分の想像や感情を投影させることを意味していたというのだ。例えば，果物の静物画に「おいしそう」「よく冷えた」などの自分の想像力から湧き上がる感情を投射させて活き活きとした作品として鑑賞したりすることである。

それが20世紀半ばになり，エンパシーという言葉の意味がいきなりシフトすることになる。1948年に米国の臨床心理学者ロザリンド・カートライトは，彼女の師であったレナード・コットレルと共に対人関係におけるエンパシーの調査を行った。そのプロセスの中で，彼女は対象への「想像の投射」という初期のエンパシーの意味を否定し，人間同士の関係性こそがエンパシーの概念の中心にあるべきと主張した。

その後も心理学の分野では実験的な研究が続けられ，やがて心理学者たちは「本物」のエンパシー(他者の考えや感情の正確な査定)と，「投射」とを区別して考えるようになった。1955年のリーダーズ・ダイジェスト誌では，エンパシーを「自分自身が感情的に巻き込まれて判断力に影響をおよぼすことなく，他者の感情を理解する能力」と定義していた。これは，現在のオックスフォード・ラーナーズ・ディクショナリーズの定義や，「コグニティヴ・エンパシー」の定義と重なる。

この1950年代のエンパシーの定義を読んで思い出したのは，『反共感論　社会はいかに判断を誤るか』(高橋洋訳，白揚社)というポール・ブルームの本だった。彼はまさに，感情的に他者に共感することの危険性の一つとして，エモーショナルに他者に入り込むと状況の判断が理性的にできなくなるので，①エンパシーは「善」ではないというアンチ論を唱えた人だからだ。

この本の原題は『AGAINST EMPATHY: The Case for Rational Compassion』である。直訳すれば，「エンパシーに抗(あらが)って　〈理性的な慈悲〉擁護論」とでもなるだろうか。慈悲(コンパッション)という言葉が使われているところなど，昨今よく耳にするようになった「コンパッショネイト・エンパシー」(前述❹参照)との関連性も言及しておく必要があるが，ポール・ブルームも著書の中で「エモーショナル・エンパシー」(邦訳版では「情動的共感」)と「コグニティヴ・エンパシー」(邦訳版では「認知的共感」)の違いに触れ，より危険なものは「エモーショナル・エンパシー」だと指摘している。つまり，感情的に対象に入り込むなということだが，これは1950年代の心理学者たちが唱えた「他者に自分自身を投射することは本物のエンパシーではない」という主張に似ている。

例えば，英国で児童に対する性的虐待事件などが起こると，SNSなどで「被害者や家族の気持ちを思えば犯人を殺してやりたい」といった極端な声があがるだけでなく，本当に容疑者が護送される車を取り囲んで生卵をぶつけに行ったりする人々が出てくる。こういうケースでも，冷静に被害者や家族の気持ちになれば，本人たちは不幸な事件は忘れて一刻も早く元の生活に戻りたいので，知らない人たちに騒がれていつまでもニュースになるのは迷惑だと思っているかもしれない。つまり，加害者にリベンジしているつもりの人たちは，被害者やその家族に自分自身の想像や怒りを投射し過ぎていると言える。他者の靴を履いているつもりが，自分の靴で他者の領域をずかずか歩いているのだ。

しかし，ポール・ブルームは，誰かの靴を履くことそれ自体も危険なことになり得ると主張する。なぜならそれは，スポットライトのごとくいまここにいる特定の人々に焦点を絞ることであり，たった1人の子どもが欠陥のあるワクチンで重病にかかって苦しむ姿を見てワクチン接種プログラムの中止を叫び，そのために数十人の任意の子どもたちを殺すようなことをさせてしまうからだという。彼はこう書いている。「この場合，あなたはそれらの子どもに共感を覚えることはないだろう。統計的な数

値に共感することなどできないのだから」。まあ確かに，数字は靴を履いていないので，無い靴は履けない。さらに言えば，人間は顔が見える人（知っている人）の靴は履けても，顔が見えない人たちの靴はあまり履こうとしないものなのだ。

他方，ジャーナリストのニコラス・クリストフのような人は，エンパシーこそがいま社会に必要なものだと精力的に主張してきた。彼が 2015 年 1 月 24 日にニューヨーク・タイムズ紙に執筆した「Where's the Empathy？」という記事はとりわけ有名になった。彼は，その記事の中で，米国には「エンパシー・ギャップ（他者の立場を想像することを困難にする認知的バイアス）」が存在していると書き，誰かを貧困に陥れる複雑な状況を理解するよう読者に呼びかけている。つまり，貧困に陥る人の靴を履いてみれば，「貧困は自己責任だ」「社会には一定数の貧しい人たちがいるのはしょうがない」というのは自らの偏見や先入観による認識の歪みだったことがわかるし，その気づきがコンパッショネイトで思いやりのある行動につながるというわけだ。

ニコラス・クリストフの考えによれば，エンパシーは各人が心に持つ認知的バイアスを外すことであり，それこそが多様性を共に認め合うことのできる社会に繋がる。しかし，ポール・ブルームの意見では，エンパシーという名の「気持ちの分かち合い」は特定の個人に焦点を当てすぎて，社会全体が良い方向に進む改革を実現するにあたっての障害にしかならない。

（中略）

わたしが関心を持っているのは，あくまでオックスフォード・ラーナーズ・ディクショナリーズが定義するところのエンパシーであり，いま使われているカテゴリー分けの中でいえば，コグニティヴ・エンパシーと呼ばれるものである。

つまり，自分を誰かや誰かの状況に投射して理解するのではなく，他者を他者としてそのまま知ろうとすること。自分とは違うもの，自分は受け入れられない性質のものでも，他者として存在を認め，その人のことを想像してみること。他者の臭くて汚い靴でも，感情的にならず，理性的に履いてみること。とはいえ，本当に人間にそんなことはできるのだろうか。しかし，エンパシーが「ability（能力）」だとすれば，きっと able な人にはできるのだろう。

そう考えるとき，この人はエンパシーの達人だったのではないかと思えるのが金子文子だ。彼女は朝鮮出身の無政府主義者，朴烈のパートナーであり，共に「不逞社（ふていしゃ）」と

いう組織を立ち上げてアナーキストや社会主義者の仲間たちと共に雑誌を発行したり，講演会を開いたりしていたが，関東大震災の2日後に警察に検束され，大逆罪の容疑をかけられて起訴され，死刑判決を受けた。後に恩赦を受けて無期懲役に減刑されるのだが，彼女は天皇からの恩赦状を破り捨てて23歳の若さで獄中死している。

彼女の死については，縊死(注2)ということになっているが，様々な説があり，特に彼女が市ヶ谷刑務所から宇都宮刑務所栃木支所に移されてから最後の3カ月間は，外界との接触をシャットアウトし，刑務所内で激しい転向の強要が行われていたとも言われている。

（中略）

わたしは彼女のことを『女たちのテロル』という本に書いたことがある。そのとき，刑務所で彼女が書いた短歌の中でもひときわ印象に残り，これぞ金子文子だと本で取り上げた一首があった。それはこんな歌である。

塩からきめざしあぶるよ　女看守のくらしもさして　楽にはあらまじ

この女看守は，金子文子に転向を強いたり，刑務所の中で彼女にひどいことをしていた人かもしれない。そうでないとしても，国家を敵に回して反天皇制を唱えていた文子にとって，刑務所の職員は彼女に思想の転向を強いる「国家の犬」であり，彼女を痛めつけていた「敵」側の人間だ。

食事も満足に与えられず，または食事を拒否して空腹だったかもしれない文子の鼻に，おいしそうなめざしの匂いが漂ってくる。「貴様らだけ飯を食いやがって」と怒りがこみあげても不思議ではない。人をこんな目にあわせておいて，呑気にめざしなんか焼きやがってふざけんなと。

だが，文子はめざしの匂いをかいで，女看守の食生活からその質素な暮らしぶりを想像してしまうのだ。ああ，あの人の生活もきっとそんなに楽ではないんだろうと。

わたしは『女たちのテロル』を書いたとき，こうした文子の性質を「やさしさ」と表現した。しかし，後になってこれこそがエンパシーなんじゃないかと考えるようになった。立場が違う人の背景をあえて想像する努力をしなくても，彼女の場合は自然にエンパシー・スウィッチが入ってしまうのだ。

(中略)

金子文子は，無籍者として成長したのでまともに学校にも通えなかった。幼くして親に捨てられ，親族に引き取られて朝鮮に渡ったが祖母や叔母からひどい虐待を受けた。文子は日本人コミュニティの人々よりも，貧しい朝鮮人の人々のほうに自分と近しいものを感じていた。日本からの独立を叫ぶ朝鮮の人々の三・一運動を見たときには，それまで感じたことがないような興奮を覚えたという。つまり，家族や学校，民族や国家といった人間が自然に「属している」と感じる枠組からいっさい外れたところで育ったのである。文子は，常に外れ者だった。これが彼女の思想家や文筆家としての特異性をつくったと言ってもいい。

(中略)

金子文子をアナーキストと呼ぶことが適当であるとすれば，それはどこまでも「self-governed(自らが自らを統治する)」を目指した生涯の在り方に尽きるが，実際に家族や学校や国家が存在する社会で本気でこれを行おうとする人は，「外れ者」になってしまう。それを恐れずに「self-governed」を目指すのはもともと「外れ者」として育った人か，「外れ者」になることを強く志向する人のどちらかだ。文子は前者である。

「わたしはわたし自身を生きる」と宣言し，「self-governed」のアナーキストとして生きた人が，他者の靴を履くためのエンパシー・スウィッチを自然に入れることができる人でもあったというのは逆説的である。彼女のことを考えると，思いきり利己的であることと，思いきり利他的であることは，実のところ繋がっているのではないかとすら思えてくる。

いずれにせよ，金子文子は，世間一般の「belonging(所属)」の感覚から完全に外れたところで成長した人だったからこそ，瞬発的に「敵 vs 友」の構図からするっと自由に外れることができたのは間違いない。ということは②「belonging」の感覚に強くはまっていればいるだけ，他者の靴は履けないということになる。属性が自分を守ってくれるものだと信じ，その感覚にしがみつけばしがみつくだけ，人は自分の靴に拘泥し，自分の世界を狭めていく。

注1　アナーキー：既成の社会秩序や権威にとらわれないこと。また，その考え。狭い意味では無政府状態の意を表わす。

注2　縊死：首をくくって死ぬこと。

特別支援・生活科学コース

（注意）・解答は指定された解答欄に横書きで記入し，字数は指定を超えないこと。

・解答用紙は1行が20字で，全部で1200字(60行)となっている。

・解答の際，句読点，引用符，カッコなどはいずれも1字に数え，算用数字およびアルファベットは1マス2字としてもよい。ただし，行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

次ページ以下の＜資料＞は，ジェームズ・J・ヘックマン著 大竹文雄解説 古草秀子訳『幼児教育の経済学』(東洋経済新報社，2015年)の一部である(ただし，出題にあたり原文の一部を変えている)。

次の**問1**から**問3**に答えなさい。

問1　認知スキルと非認知スキルについて説明した上で，両者の関係性についても述べなさい(300字以内)。

問2　2つの図から読み取れる特徴について要約しなさい(300字以内)。

問3　著者の意見を踏まえて，幼少期の教育に対するあなたの考えを記述しなさい(600字以内)。

今日のアメリカでは，どんな環境に生まれあわせるかが不平等の主要な原因の一つになっている。アメリカ社会は専門的な技術を持つ人と持たない人とに両極化されており，両者の相違は乳幼児期の体験に根差している。恵まれない環境に生まれた子供は，技術を持たない人間に成長して，生涯賃金が低く，病気や10代の妊娠や犯罪など個人的・社会的なさまざまな問題に直面するリスクが非常に高い。機会均等を声高に訴えながら，私たちは生まれが運命を決める社会に生きているのだ。

生まれあわせた環境が人生にもたらす強力な影響は，恵まれない家庭に生まれた者にとって悪である。そして，アメリカ社会全体にとっても悪である。数多くの市民から社会に貢献する可能性を奪っているのだ。

これは是正することができる。適切な社会政策を施せば，技能労働者と単純労働者との両極化を阻止できるのだ。だが，適切な政策は入手可能な最善の科学的証拠によって情報を与えられなければならない。そのためには，代替となる政策の利益だけでなく，費用にも細心の注意を払う必要がある。証拠を入念に検討したところ，社会政策策定のための三つの大きな教訓が示唆される。

第一に，人生で成功するかどうかは，認知的スキルだけでは決まらない。非認知的な要素，すなわち肉体的・精神的健康や，根気強さ，注意深さ，意欲，自信といった社会的・情動的性質もまた欠かせない。IQテストや学力検査やOECD生徒学習到達度調査(PISA)によるテストなどによって測定される，認知的スキルばかりが注目されがちだが，じつは非認知的な性質もまた社会的成功に貢献しており，それどころか，認知的な到達度を測定するために使われる学力テストの成績にも影響する。

第二に，認知的スキルも社会的・情動的スキルも幼少期に発達し，その発達は家庭環境によって左右される。ところが，アメリカでは過去40年間にわたって家庭環境が悪化してきた。恵まれない家庭に生まれることが，子供たちに格差をもたらしている。そこでは生活の質がもっとも基本的な問題であり，両親がそろっているかどうかや，親の収入や学歴といった要素は二次的なものだ。そして，そうした家庭環境は世代を超えて蓄積される傾向がある。

第三に，幼少期の介入に力を注ぐ公共政策によって，問題を改善することが可能

だ。人間のすべては遺伝子で決まるという考え方に反して，恵まれない家庭に生まれた子供に幼い時期から手をかけることによって，はっきりした永続的な効果をもたらすことができることが，研究によって証明されている。この研究結果は，支えてくれる家庭環境の欠落が子供時代や成人してからの人生に有害な影響をもたらすことを示す，非実験的な膨大な証拠と一致している。幼少期の教育に介入することによって，認知的スキルだけでなく社会的・情緒的スキルをも向上させることができる。学校教育を推進し，犯罪率を低下させ，労働者の生産効率を向上させ，10代での妊娠を少なくできるのだ。さらに，生徒と教師の比率見直し，職業訓練，犯罪者更生プログラム，成人に読み書きを教える成人教育プログラム，授業料減免，警察にかかる費用など，従来の公共政策で議論の焦点となってきた成長後の対策よりも経済的・社会的影響がはるかに大きい。そればかりか，早い時期に対策を実施すれば，成長後の対策の効果を大きく高められる。技術は技術をもたらし，意欲は意欲をもたらすのだ。

要するに，個人の成功を実現することはもとより，機会均等化を進め，経済を発展させ，より健康な社会を築くためには，社会政策を大きく変化させる必要がある。早い時期の対策と，それによって得られた効果を強化するために設計された成長後の対策とが重要なのだ(オバマ政権は「頂上へのレース」プログラム[訳注：全米50州を対象に，教員の質と生徒の成績を上げるためのもっとも革新的な計画を提案した州にのみ補助金を与える教育政策]で幼児教育への予算を増額したものの，各自治体の予算削減によって就学前教育の予算は全国的に危機に瀕している)。また，対策は認知能力だけでなく，社会的・情動的スキルを伸ばすものであるべきだ。

(中略)

幼少期の重要性

人生の好機を得るために重要な役割を果たす認知・非認知能力の格差は，どの社会経済的集団でも非常に早くから開く。子供たちの認知・非認知能力がどのようにして生じ，社会的背景によって階層化されるかを考えてみよう。

私たちの研究では，子供が18歳の時点での認知的到達度――大学へ進学するかどうかの強力な予測因子――を母親の学歴別にまとめたところ，子供が小学校へ入学す

る6歳の時点ですでに格差が明白だった。アメリカの学校教育は平等ではなく，テストの点数の格差を軽減したり増幅したりするほどの大きな役割は果たしていない。

社会性と情動のスキルでも，同じようなパターンが見られる。これらのスキルの発達を測る尺度は「反社会的傾向スコア」と呼ばれる，行動上の問題に関する尺度である。ここでも，格差は早期に開き，長年にわたって継続する。また，学校教育はこのパターンに大きく影響しない。

（中略）

アメリカの子供が貧困家庭に生まれる率は以前よりも高くなっているので，能力格差を説明するうえでの家庭環境の重要性は大きな懸念材料である。そして，恵まれない環境で生まれ育つ子供が，中流以上の階級の子供が受けるような豊かな幼児教育を受けられないというのは純然たる事実だ。

ひとり親家庭で育つ子供の割合は劇的に増加しており，その主要な原因は未婚のまま子供を持つ母親が著しく増えていることにある。未婚の母親を持つ5歳以下のすべての子供の割合は，学校教育から脱落した女性を母親として生まれた子供の35パーセント以上にのぼっている。この傾向はとくにアフリカ系アメリカ人で顕著である。高学歴女性を母親に持つ子供と低学歴女性を母親に持つ子供との環境格差が生まれている。

高学歴な女性の就労率は，低学歴な女性の場合よりもはるかに高い。同時に，広範囲な調査研究によれば，大卒の母親は低学歴な母親よりも育児に多くの時間を割き，とくに情操教育に熱心だ。彼女たちはわが子への読み聞かせにより多くの時間をかけ，一緒にテレビを観る時間はより少ない。教育程度の高い女性が未婚で子供を産む率は10パーセント未満だ。彼女たちは結婚も出産も比較的遅く，教育を修了することを優先する傾向が強い。自分自身の収入も配偶者の収入も安定している。子供の数が少ない。こういった要素がはるかにゆたかな子育て環境をもたらし，それが子供の語彙や知的能力に劇的な違いをもたらす。両親が安定した結婚生活を営んでいる子供には恩恵がとくに明白で，子育ての質においての，持つ者と持たざる者との格差は，過去30年間に拡大した。高学歴の女性を母親として，安定した結婚生活を営む家庭

に生まれ育つ子供は，そうでない子供よりも著しく有利だ。要するに，高学歴な母親ほど仕事を持ち，安定した結婚生活を営み，わが子の教育に熱心だということだ。

社会学者のサラ・マクラナハンによれば，どんな家庭に生まれるかによって子供は「運命の分かれ道」に直面するという。恵まれた家庭に生まれた子供は，経済的にも認知能力的にも有利な環境を得られる可能性が高く，恵まれない家庭に生まれた子供は得られる可能性が低い。両親がそろっている家庭と比較して，ひとり親家庭は子供への投資にあまり熱心でない。ひとり親家庭では，うつ病や妊婦の薬物使用や喫煙が多く，母乳育児や語りかけによる刺激が少ないと，マクラナハンは指摘している。

ロバート・アンダ，ヴィンセント・フェリッティらの研究チームは，家庭内暴力や虐待やネグレクトといった小児期の悲惨な体験が成人後にもたらす影響について調査した。その結果，子供時代のそうした体験が，成人してからの病気や医療費の多さ，うつ病や自殺の増加，アルコールや麻薬の乱用，労働能力や社会的機能の貧しさ，能力的な障害，次世代の能力的欠陥などと相関関係があるとわかった。逆境的小児期体験(ACE)について調べたこの研究では，18歳までに虐待やネグレクト，家庭内でのアルコールや薬物の乱用などの体験があったかどうかを被験者に尋ね，一つの体験を1点と数えて合計点で深刻度を計測した。つまり，合計点が高いほど小児期の環境が悪いということだ。成人被験者の3人に2人が少なくとも1点，12.5パーセントは4点以上だった。小児期の逆境的経験がもたらす悪影響は著しい。

この調査結果は発達心理学の分野の膨大な研究によって裏づけられ，神経学的にも筋が通っている。幼いころにある特定の入力(インプット)が欠けていると，そのインプットに関連する情報を感じ，気づき，理解し，判断し，それに従って行動するという脳のシステムの発達に異常が生じる。ルーマニアの幼児に関する研究は，幼い時期の重要性を示している。ルーマニアの国営孤児院では，生まれたばかりの子供たちを対象とする邪悪な実験が意図せずに実施された。孤児院の生活環境は劣悪だった。収容された子供たちは社会的・知的な刺激を最低限しか与えられずに育った結果，認知機能の発達が遅れたり，社会的行動に深刻な障害が生じたり，ストレスに対する異常な過敏性が見られたりしていた。個々の孤児院の質的状況や，里親家庭の環境，孤児院にいた期間などによって差はあったものの，おしなべて養子になるのが遅いほど回復が進まなかった。ルーマニアの事例に関する研究は，他の状況から得られる理解に合致する。

すなわち，幼少期に深刻なネグレクトに遭った子供は，認知や情動や健康に長期的な問題を抱えることが多い。

子供たちが問題を抱えた一因は，幼少期の親密なふれあいが脳の機能をつかさどる重要な部分の発達に関連していることにある。親密なふれあい体験が欠落したことによって，脳の発達に異常が生じるのだ。ネグレクトされて育った3歳児をそうでない子供と比較したところ，脳のサイズが小さく，脳室が肥大し，大脳皮質の組織が委縮していることなどがわかった。

つまり，幼少期の環境は重要であり，子供には注意を払うことが必要だ。だが，こうした幼少期の逆境的体験はどのようにして違いをもたらすのだろうか？多くの社会科学者が家庭状況を測るのに使用してきた物差しは，両親がそろっているか否かと世帯所得だ。だが，発達心理学や神経科学の研究から得られる証拠は，これらの物差しは子供がどのように育つかを決定するためのひどく大ざっぱな目安にしかならないことを示している。両親がそろっていることに利益があるとする意見は多いものの，父親に反社会的傾向があったり，結婚生活が破綻したりしていれば，父親の存在はかえってマイナス要因になりうる。子供の不利益を決定する主要な原因は，たんなる経済状況や両親の有無よりも成育環境の質であることを示す証拠はたくさんある。

（中略）

ネイティブアメリカンの居住区がカジノの開設でにわかに経済的にゆたかになった事例は，子供が置かれた環境を測るための従来の目安が不確かであることを裏づけている。この研究によれば，子供たちの破壊的行動がかなり減った。介入による有益効果は家族内の変化によってもたらされた。経済的により豊かになれば，親による子育てが改善し，親が子供に手をかける。この自然界における実験では，収入が子育てを改善したが，子供の破壊的行動を減らしたのはじつは子育ての変化だった。

したがって懸念されるのは，幼少期の環境が成人後に大きな影響をもたらすことと，アメリカでは逆境で育つ子供の数が年々増大していることだ。また，安心材料は，環境を変化させて子供の重要なスキルを向上させることは可能であり，私たちの社会は，格差の拡大や社会全体の劣化に手をこまねいて眺めている必要はないということだ。政策によって状況を変化させることができるのだ。

幼少期の介入が変化をもたらす

恵まれない子供の幼少期の環境を充実させる数々の試みは，遺伝子決定論に反論する強力な証拠を提供している。そうした研究は家庭環境の強化が子供の成長ぶりを改善することを示し，改善の経路として非認知的スキルの役割を強調する。

もっとも信頼できるデータは，恵まれない家庭の子供を対象に幼少期の環境を実質的に改善した複数の研究から得られた。なかでもペリー就学前プロジェクト，アベセダリアンプロジェクトという二つの研究は無作為割り当てを使用し，子供が成人するまで追跡調査したことから，きわめて意義深い。

これらの研究は，幼少期の環境をゆたかにすることが認知的スキルと非認知的スキルの両方に影響を与え，学業や働きぶりや社会的行動に肯定的な結果をもたらすことを示した。しかも，そうした効果はずっと後まで継続する。他の研究は――たとえば，妊娠した少女に対して家庭訪問をして子育てや健康維持について教えた＜看護師・家族パートナーシップ＞などは――この結論を支持している。

ペリー就学前プロジェクトは，1962年から1967年にミシガン州イプシランティで，低所得でアフリカ系の58世帯の子供を対象に実施された。就学前の幼児に対して，午前中に毎日2時間半ずつ教室での授業を受けさせ，さらに週に一度は教師が各家庭を訪問して90分間の指導をした。指導内容は子供の年齢と能力に応じて調整され，非認知的特質を育てることに重点を置いて，子供の自発性を大切にする活動を中心としていた。教師は子供が自分で考えた遊びを実践し，毎日復習するように促した。復習は集団で行い，子供たちに重要な社会的スキルを教えた。就学前教育は30週間続けられた。そして，就学前教育の終了後，これを受けた子供と受けなかった対照グループの子供を，40歳まで追跡調査した。

（中略）

ペリー就学前プロジェクトの利益（費用1ドル当たりの年間利益）の率は6パーセントから10パーセントと見積もられる（第二次世界大戦後から2008年までの株式の配当5.8パーセントよりも多い）。この見積もりは，このところ考慮されるようになった心と体の健康がもたらす経済的利益を含んでいないので，控えめな数字である。

幼少期の教育を上手に実行することは，大きな利益をもたらす可能性がある。ではもっと後になってからの介入はどうだろう？　じつのところ，子供が成人後に成功するかどうかは幼少期の介入の質に大きく影響される。スキルがスキルをもたらし，能力が将来の能力を育てるのだ。幼少期に認知力や社会性や情動の各方面の能力を幅広く身につけることは，その後の学習をより効率的にし，それによって学習することがより簡単になり，継続しやすくなる。

公的な職業訓練プログラムや成人対象の読み書き教育，囚人への社会復帰プログラム，貧困層の成人に対する教育プログラムなど，目下のところ設定されている対策は経済的成果が少ない。そのうえ，そのような後になってからの介入に一定の恩恵があるとした研究でも，恵まれない家庭の子供の能力は，さまざまな面で就学前に介入を受けた子供の能力に劣ると示されている。土台が強いほど，後になってからの投資から得られるものが大きいのだ。

スキルがスキルを生む相乗効果のせいで，幼少期の効果的な介入から得られたものは，その後も高品質の学習体験を続けた場合にもっとも効果が高くなる。

そして，幼少期の介入は少なくとももう一つの重要な特質を持っている。大半の社会政策を悩ます公平性と効率性とのトレードオフがほぼ存在せず，介入を実施するための税金徴収に多少の死荷重[訳注：課税による失われた費用]があるものの，損失は利益を上回らない。幼少期の介入は経済的効率性を促進し，生涯にわたる不平等を低減する。恵まれない環境で幼少期にきちんとした基礎的なスキルを育成しないままに思春期になってしまうと，状況を改善しようとする介入は公平性と効率性のトレードオフに直面してしまう。そして，思春期の介入は，経済的効率性の点から正当化するのが困難であり，一般に収益率が低い。それとは対照的に，幼少期に投資を集中し，その後の投資でフォローアップすれば，公平性と効率性の両方を達成できるのだ。

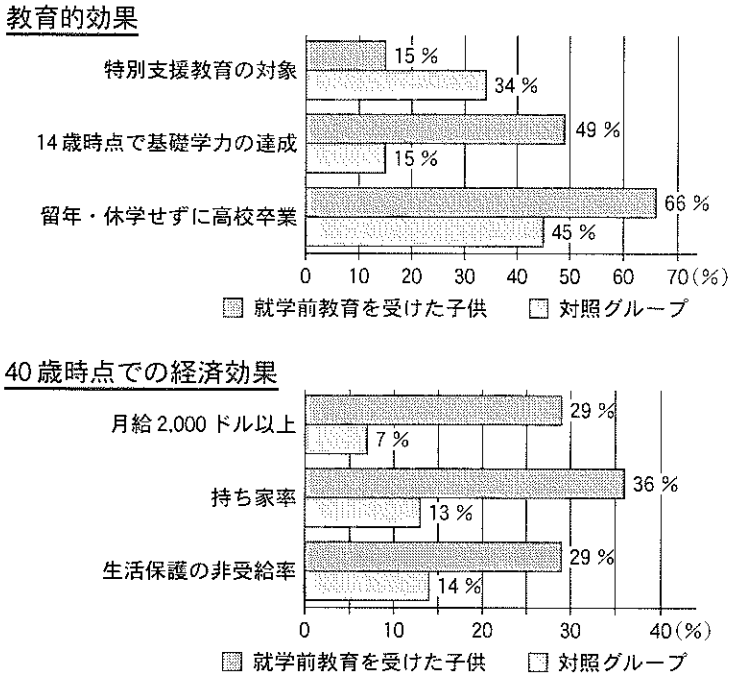

図1　ペリー就学前プロジェクトの効果

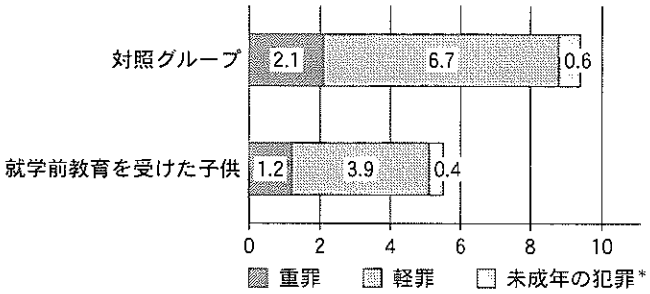

図2　40歳時点での逮捕者率

(出所)　W.S. Barnett, "Benefit-Cost Analysis of Preschool Education." 2004.

＊19歳未満の逮捕

コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，英語表現Ⅰ・Ⅱ

Ⅰ 次の英文を読み，設問に答えなさい。

People are gathering for a meeting scheduled to start at 9 am. Andrew is the first to arrive, soon followed by Steve. *Good morning*, they say to each other. Nothing unusual about that.

In walks Emily. *Good morning*, she says to Andrew, and then *Good morning* to Steve. Then she *does a double take, and says, *Oh sorry, I've already said good morning to you, haven't I.* It seems they met in the car park outside, and exchanged the first greeting of the day there.

(1) Why does Emily feel the need to apologize?

A polite vocal greeting is the norm when people who are about to engage in some sort of interaction meet each other. It is of course possible to stay silent, but that would be very unusual. If Emily said nothing on her arrival, it would convey a negative attitude — some sort of private problem, perhaps, or a suppressed *antagonism. The norm is to break the silence, to recognize each other with a brief *verbal handshake. (2) It's a mutual affirmation of identity, an acceptance by each that the other has a personal role to play in what is about to happen.

So if we're greeted a second time, it's as if that first encounter never happened. The double-greeted one might well feel: 'Was I so unimportant to you that you don't even remember meeting me a little while ago?' Sensitive double-greeters realize they've made a small social *faux pas, so they rush to apologize for it.

It's a basic politeness rule in English: we don't say *good morning* to somebody more than once. And we are good at keeping a mental *log of the

people we meet so that we don't double-greet. It's a remarkable and totally unconscious skill.

But it only applies to greetings. It doesn't apply to farewells. Imagine now the end of the meeting. It has lasted all day, and as people leave they say *good night* to each other. Emily is almost the last to leave. She says *good night* to Steve and goes out. Then, having forgotten a bag, half a minute later she returns. Steve is still there. She picks up her bag, and leaves a second time. *Good night* she says to him again, and he does the same. Neither apologizes for saying *good night* a second time.

If you're learning to speak English, *good morning* and *good night* are two of the phrases you pick up early on, along with *good afternoon* and *good evening*. (3)They seem 'the same' — and from the point of view of how they are grammatically constructed, they are. But from the point of view of *pragmatics — how they are actually used in the language — they are some distance apart.

(出典：David Crystal, *Let's Talk: How English Conversation Works.* 2020. 一部改変)

〔注〕 do a double take　はっと驚く　　antagonism　敵意
verbal　言葉の，口頭の　　faux pas　非礼，無作法
log　記録　　pragmatics　語用論（言語研究の一分野）

設問 1　冒頭の挿話における下線部(1)に対する答えを本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 2　主語 It の具体的な内容がわかるように，下線部(2)を日本語に訳しなさい。

設問 3　下線部(3)の具体的な内容を，引用符が付されていることをふまえて日本語で説明しなさい。

II 次の英文を読み，設問に答えなさい。

One-third of a person's life is said to be given over to sleep — but getting enough of it, and of sufficient quality, can be a challenge for many people, especially under the *duress of a worldwide pandemic. Help, however, is at hand as new services (1) spread using artificial intelligence (AI), sensors and 3D scans as well as so-called "sleep masters" to give people advice on the best conditions for achieving a good night's rest.

S'UIMIN, a Tokyo venture *spun off from the University of Tsukuba, has developed an AI device that measures brain activity during sleep. "You have a C evaluation," a person who recently *tested out the service was informed by the device's *readout. "The quality of your sleep is good, but your average sleeping time is five hours — too short and irregular."

The device, called the "InSomnograf," comprises a head strap with *electrode stickers (2) that must be put on before going to sleep for around five days. The stickers are placed on five areas of the face — one each on the center, left and right of the forehead, and one on each side of the neck. It calculates more than 20 different sleep indicators, including how long it takes to fall asleep and the amount of time spent in sound and in *fitful sleep. Data is uploaded to the cloud, with daily reports available through smartphones based on individual sleep health screenings. Brain activity is analyzed by AI based on the data of hundreds of people. Hideaki Kondo, a medical specialist in charge of sleep evaluations at Inoue Hospital in Nagasaki, southwestern Japan, praised the AI device for its simplicity.

Recently, more people have been complaining of *insomnia and other sleeping disorders due to disruptions from the novel coronavirus pandemic, experts say. Bedding manufacturer Nishikawa Co. based in Tokyo has set up "sleep consultation" clinics at its outlets nationwide where store staff referred to as sleep masters are on hand to help customers resolve their sleeping

issues. Data, such as daily activity levels and sleeping conditions, are measured with a small sensor attached to the user's waist for about a week. Another sensor tracks environmental conditions by recording data such as bedroom temperature, humidity, brightness and noise. Inside the store, a device measures which parts of the body are under pressure when lying down on a bed. The results are displayed on a monitor, and a 3D scanner is also used to check for skeletal distortions. The sleep master suggests personalized bedding options.

Since the pandemic started, the number of people coming for consultations has doubled. (3) With more people working from home, many complain about not getting enough exercise and not modulating their work-rest lives in a balanced way. "Comfortable sleep is decided based on (4) lifestyle habits, sleeping environment, and bedding," said sleep master, Arata Otsuka. "I advise getting moderate exercise during the day, soaking in the bath before you sleep, and not looking at your smartphone right before sleeping."

(出典："Are you sleeping well? Let your AI device be the judge, say Japan researchers," *Mainichi Japan*. July 20, 2021. 一部改変)

毎日新聞2021年7月20日付け記事（共同通信配信）

〔注〕 duress 苦難　　spin off 派生する

test out 実際にためしてみる　　readout 読み出された情報

electrode sticker 電極のステッカー　　fitful 断続的な

insomnia 不眠症

設問 1 下線部(1)の具体的な内容を日本語で説明しなさい。

設問 2 下線部(2)が装着される場所を具体的に日本語で説明しなさい。

設問 3 下線部(3)を日本語に訳しなさい。

設問 4 下線部(4)について言及されている具体的な内容を日本語で説明しなさい。

Ⅲ 次の英文を読み，設問に答えなさい。

Children from the poorer *strata of society begin life not only with material disadvantages but *cognitive ones. Decades of research have confirmed this, including (1) a famous 1995 finding by psychologists Betty Hart and Todd Risley: By age four children reared in poverty have heard 30 million fewer words, on average, than their *peers from wealthier families. That gap has been linked to *shakier language skills at the start of school, which, in turn, predicts weaker academic performance.

But the sheer quantity of words a toddler hears is not the most significant influence on language *acquisition. (2) Growing evidence has led researchers to conclude quality matters more than quantity, and the most valuable quality seems to be back-and-forth communication — what researchers variously call conversational turns, duets or *contingent talk.

A paper published February in *Psychological Science* brings a new dimension of support to this idea, offering the first evidence these exchanges play a vital role in the development of (3) Broca's area, the brain region most closely associated with producing speech. Further, the amount of conversational turns a child experiences daily outweighs *socioeconomic status in predicting both activity in Broca's area and the child's language skills.

The study, from the lab of *neuroscientist John Gabrieli of Massachusetts Institute of Technology, involved 36 children, ages four to six, from a range of socioeconomic backgrounds. It had three components: First, researchers used standardized tests to evaluate each child's verbal ability and derive a composite score. Second, the brain of each child was scanned using *functional magnetic resonance imaging (fMRI) while the child listened to very short (15-second) stories. Lastly, adult-child communication at home was evaluated for two days using a *state-of-the-art recording and analysis system called LENA (Language Environment Analysis) to measure adult speech, the child's utterances and

their conversational turns (4) — paired exchanges separated by no more than five seconds.

（出典：Claudia Wallis, "Talking with — Not Just to — Kids Powers How They Learn Language: Back-and-forth exchanges build the brain's language center and verbal ability," *Scientific American Mind*, 29 (3). 2018. 一部改変）

〔注〕 strata 階層 （stratum の複数形） cognitive 認知的
peer 同世代の者 shaky 不安定な acquisition 獲得
contingent 偶発的 socioeconomic 社会経済的
neuroscientist 神経科学者
fMRI 脳内各部の血流を測定する方法
state-of-the-art 先端技術を使った

設問 1 下線部(1)の具体的な内容を日本語で説明しなさい。

設問 2 下線部(2)を日本語に訳しなさい。

設問 3 下線部(3)は本文でどのように説明されているか，日本語で書きなさい。

設問 4 下線部(4)の具体的な内容を日本語で説明しなさい。

Ⅳ 次の文章を読み，設問に答えなさい。

Daniel Dawson *abhorred olives as a child. Their bitter flavor turned him, well, bitter. Now he's the senior editor for Olive Oil Times, a trade publication dedicated to all things olive oil. "Once I decided that I didn't like a food item, I had a zero-tolerance policy for it," Dawson, 29, says. (1)"私は数年前にオリーブの味を再発見した経験でその方針を見直しました."

Children are often described as picky eaters when they're *averse to trying different foods. Steak? *Ew. Chicken? Ew. Vegetables? Double ew. While kids often seem to grow out of it, not everyone does. And some picky eaters aren't just picky, but grappling with an eating disorder. "It's not necessarily the case that people are going to grow out of being hesitant about these specific foods," Dr. Sam Scarnato of the Center for Nutritional Psychology says. So, how does one conquer the picky eating monster? (2)子どもと大人の治療は状況の深刻さにより異なるだろう, but experts say everything from repeated exposure to foods and consulting with medical professionals could best address problems before they *spiral out of control. Scarnato comes across picky eating daily, and finds it runs in families. If a parent or caregiver balks at broccoli, they shouldn't be shocked when their child refuses green veggies too. Health coach Dianna Carr, who manages Be Well Health Coaching LLC, says (3)ひょっとすると，そのような大人たちは子どもの時に多くの異なる食べ物に触れる機会がなかったのかもしれない, or they had a traumatic childhood experience like choking on a certain food.

Sometimes it's about genetics. "Some people are genetically predisposed to be super-tasters," Jenna Griffin, founder and CEO of Generations Nutrition & Wellness says. Super-tasters have an acute sense of taste and experience bitter flavors more intensely. (4)"これが原因で，彼らはキャベツ，ブロッコリーなどのような健康によい野菜を避けるかもしれない, because the bitter taste is overpowering," Griffin adds.

（出典：David Oliver, “So, you're picky eater. How to conquer your food fear — and when to get help,” *USA Today*. July 8, 2021. 一部改変）

〔注〕 abhor ひどく嫌う　　averse to を嫌っている
　　ew 嫌悪を表す間投詞　　spiral out of control 手に負えなくなる

設問 下線部(1)～(4)を英語に訳しなさい。

数　　学

（数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B）

Ⅰ 次の問いに答えなさい。

(1) $x = \log_{10} 2$，$y = \log_{10} 3$ とおくとき，次の各値を x，y を用いて表しなさい。

(i) $\log_2 3$　　(ii) $\log_5 6$

(2) 不等式 $\sin\theta - \dfrac{\tan\theta}{2} > 0$ を解きなさい。ただし $-\dfrac{\pi}{2} < \theta < \dfrac{\pi}{2}$ とする。

(3) 不等式 $k(x^2 + x + 1) > x + 1$ が全ての実数 x について成り立つような実数 k の値の範囲を求めなさい。

(4) 次の方程式を複素数の範囲で解きなさい。

$$(x^2 + 2x + 1)(x^2 + 2x + 9) + 12 = 0$$

II 次の問いに答えなさい。

(1) 定数 a, b が $\lim_{x \to 2} \dfrac{a\sqrt{x^2+2x+8}+b}{x-2} = \dfrac{3}{4}$ を満たすとき a, b の値を求めなさい。

(2) 定積分 $\int_0^3 2x\sqrt{4-x}\,dx$ を計算しなさい。

(3) 数列 $\{a_n\}$ は，漸化式

$$a_1 = 2,\ a_{n+1} = 2a_n + 2 \qquad (\text{ただし } n = 1, 2, 3, \cdots)$$

を満たす。一般項 a_n を求めなさい。

Ⅲ 次の問いに答えなさい。

(1) 18 と 30 のどちらで割っても 7 余る 3 桁の自然数は何個あるか求め，それらの総和を求めなさい。

(2) 1 から 6 までの自然数が等確率で出てくるサイコロを 3 回振るとき，以下の問いに答えなさい。

(i) 出た目の積が 5 の倍数になる確率を求めなさい。

(ii) 出た目の積が 10 の倍数になる確率を求めなさい。

Ⅳ 三角形ABCはAB = 6，BC = 10，CA = 9を満たすとする。角BACの2等分線と辺BCの交点をDとするとき，以下の問いに答えなさい。

(1) $\overrightarrow{AB} = \vec{b}$，$\overrightarrow{AC} = \vec{c}$を用いて，$\overrightarrow{AD}$を表しなさい。

(2) 内積$\vec{b} \cdot \vec{c}$を求めなさい。

(3) 三角形ABCの内心をIとする。$\overrightarrow{AB} = \vec{b}$，$\overrightarrow{AC} = \vec{c}$を用いて，$\overrightarrow{AI}$を表しなさい。

(4) $|\overrightarrow{AI}|$を求めなさい。

$\boxed{\text{V}}$ 関数$f(x) = x\sin x$について次の問いに答えなさい。

(1) 第1次導関数$f'(x)$および第2次導関数$f''(x)$を求めなさい。

(2) $f(x)$は$x = 0$で極小値を持つことを示しなさい。

(3) $y = f(x)$のグラフの$0 \leqq x \leqq \pi$の部分とx軸で囲まれた部分をDとする。Dの面積を求めなさい。

(4) Dをx軸の周りに1回転してできる回転体の体積を求めなさい。

三　B「臣居官為長、不与下吏譲位。受禄為多、不与下吏分利。」(臣、官に居ること長たりて、下吏と位を譲らず。禄を受くること多たりて、下吏と利を分かたず。)を現代語訳しなさい。また、「不与下吏譲位」部分について、書き下し文に従い返り点を施しなさい。

四　C「虚」の指す内容について六十字程度(句読点を含む)で説明しなさい。また、そのことを端的に表している語を本文中から二文字で抜き出しなさい。

謂ヒ也。

（『韓詩外伝』巻二による）

＊設問の都合上、一部訓点を省き、文字を変更・省略した箇所がある。

注 (1) 晋文侯――春秋時代の晋国の君主。
(2) 李離――文侯に仕えた臣下。
(3) 大理――司法長官のこと。
(4) 聴――裁くこと。
(5) 廷――法廷のこと。
(6) 寡人――君主の謙称。
(7) 闇行――愚かな行為。
(8) 詩――『詩経』のこと。

一 A「使李離為大理」をすべて平仮名で書き下しなさい。

二 文中の［　　］部分に入る最もふさわしい文を次から一つ選びなさい。

① 大理有罪、非子之罪也　② 大理無罪、当子之罪也
③ 寡人有罪、非子之罪也　④ 寡人無罪、当子之罪也
⑤ 下吏有罪、非子之罪也　⑥ 下吏無罪、当子之罪也

〔2〕

晉文侯使李離為大理。過聽殺人、自拘於廷、請死於君。

君曰、官有貴賤、罰有軽重、□。李離対曰、臣居官為長、不与下吏讓位。受禄為多、不与下吏分利。今過聽殺人、而下吏蒙其死、非所聞也。不受命。君曰、自以為罪、則寡人亦有罪矣。李離曰、法失則刑、刑失則死。君以臣為能聽微決疑。今過聽殺人之罪、罪当死。君曰、棄位委官、伏法亡国、非所望也。趣出、無憂寡人之心。李離対曰、政乱国危、君之憂也。軍敗卒乱、将之憂也。夫無能以事君、闇行以臨官、是無功以食禄也。臣不能以虚自誣。遂伏剣而死。

君子聞之曰、忠矣乎。詩曰、彼君子兮、不素餐兮。李先生之

十二

注（1）　隠れなむ――隠れてしまおう
（2）　飽かなくに――満足していないのに
（3）　まだきも――早くも
（4）　あらなむ――あってほしい

「若小君」は、この古歌を詠みあげることで、「俊蔭の娘」にある思いを暗示している。その思いとして最も適切なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

①　月は見飽きてもあなたを見飽きることはない。
②　あなたは隠れる月のように冷たい人だ。
③　はやばやと家の奥へ入らなくてもよいではないか。
④　あなたと私を隔てる障害物を取り除いてしまいたい。
⑤　もっと私と一緒に月を愛（め）でて過さないか。

六　Dについて、次の（1）（2）の問いに答えなさい。

（1）　この歌に用いられている掛詞について、左の例にならって説明しなさい。
「身をうき草の」についての解答例――「身を憂き」の「憂き」に「浮き草」の「浮き」をかける。

（2）　「影を頼みし人」は誰を指すか。

七　E「入りぬれば」の歌は五で示した「飽かなくに」の古歌を踏まえている。「入りぬれば」の歌は「飽かなくに」の歌をどのように取り入れているか。両者の共通点と相違点をまとめなさい。

注(1) 御社――賀茂神社
(2) 昼見えつる人――俊蔭の娘を指す。ただし、若小君はまだその名を知らない。
(3) 野藪――野原のやぶの茂った場所。
(4) 心ありし人――風流を解した人。ここは故俊蔭を指す。
(5) 浅茅生――雑草の代表であるチガヤがまばらに生えているところ。
(6) 簀子――寝殿造りの廂の外側にある濡れ縁。
(7) 塗籠――周囲を壁で塗りこめた部屋。

一 破線部ア・イを現代語訳しなさい。

二 Aについて、接続助詞「ものから」の意味について、最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。
① 逆接の確定条件　② 順接の確定条件　③ 単純な接続　④ 逆接の仮定条件　⑤ 打消接続

三 波線部a・bの単語の意味を答えなさい。

四 Bについて、次の(1)(2)の問いに答えなさい。
(1) 「覚えず」の主語を補いなさい。
(2) なぜ、おそろしいと思わなかったのか、説明しなさい。

五 Cについて、「飽かなくにまだきも月の」は、次に示す『古今和歌集』所載の古歌の一部である。

惟喬親王の狩しける供にまかりて、宿舎に帰りて、夜一夜酒を飲み、物語をしけるに、十一日の月も隠れなむとしける折に、親王酔ひて内へ入りなむとしければ、よみ侍りける　業平朝臣

飽かなくにまだきも月の注(2)隠るるか山の端注(3)逃げて入れずもあらなむ注(4)

十

Ⅱ

〔1〕 次の文章は『うつほ物語』「俊蔭巻」の一節で、賀茂神社参詣の途中に俊蔭の娘を見そめた若小君が、その帰途に娘の邸を訪れる場面である。なお、このとき俊蔭はすでに亡くなっている。この文章を読んで後の問いに答えなさい。

かくて、御社(注1)に詣で着きたまひて、神楽奉りたまふに、若小君、昼見(注2)えつる人、ア何ならむ。いかで見むと思して、暗く帰りたまふに、人に立ちおくれて、みな人渡りはてぬるに、若小君、家の秋の空静かなるに、見めぐりて見たまへば、野藪(注3)のごとA おそろしげなるものから、心ありし(注4)人の急ぐことなくて、心に入れて造りしところなれば、木立よりはじめて水の流れたるさま、草木の姿など、をかしく見どころあり。蓬、葎の中より、秋の花aばつかに咲き出でて、池広きに月おもしろく映れり。B おそろしきこと覚えず、おもしろきところを分け入りて見たまふ。秋風、河原風まじりてはやく、草むらに虫の声乱れて聞こゆ。月隈なうあはれなり。人の声聞こえず。かかるところに住むらむ人を思ひやりて、独り言に、

イ 虫だにもあまた声せぬ浅茅生(注5)にひとり住むらむ人をこそ思へ

とて、深き草を分け入りたまひて、屋のもとに立ち寄りたまへれど、人も見えず。ただ薄のみいとおもしろくて招く。隈なう見ゆれば、なほ近く寄りたまふ。

東面の格子一間あげて、琴をbみそかに弾く人あり。立ち寄りたまへば入りぬ。C「飽かなくにまだきも月の」などのたまひて、簀子(注6)のはしにゐたまひて、「かかる住居したまふは誰ぞ。名のりしたまへ」などのたまへど、答へもせず。内暗なれば、入りにし方も見えず。月やうやう入りて、

D 立ち寄るとみるみる月の入りぬれば影を頼みし人ぞわびしき

また、

E 入りぬれば影も残らぬ山の端に宿惑はして嘆く旅人

などのたまひて、かの人の入りにし方に入れば、塗籠(注7)あり。そこにゐて、もののたまへど、をさをさ答へもせず。

七　Fについて、「逆照射する形でウチの立ち位置を表明している」とはどういうことか、分かりやすく説明しなさい。

八　本文中の空欄a～jには「ウチ」「ヨソ」のいずれかの語が入る。空欄に入る語の組み合わせとして適切なものを以下からひとつ選び、記号で答えなさい。

①

a ウチ	b ウチ	c ヨソ	d ウチ	e ウチ
f ヨソ	g ウチ	h ヨソ	i ウチ	j ヨソ

②

a ヨソ	b ヨソ	c ヨソ	d ウチ	e ウチ
f ヨソ	g ヨソ	h ウチ	i ヨソ	j ウチ

③

a ウチ	b ウチ	c ヨソ	d ウチ	e ウチ
f ヨソ	g ウチ	h ヨソ	i ヨソ	j ウチ

④

a ウチ	b ヨソ	c ヨソ	d ウチ	e ウチ
f ヨソ	g ヨソ	h ウチ	i ウチ	j ヨソ

⑤

a ウチ	b ウチ	c ヨソ	d ウチ	e ウチ
f ヨソ	g ヨソ	h ヨソ	i ウチ	j ヨソ

八

出されることが指摘できる。［ i ］に対する意識の偏重は、逆に［ j ］に対する負の意識の偏重を生むことに通じることから、それが異文化理解の阻害要因となるものといえよう。

（鈴木岩弓「ウチとヨソの相克の中で」による）

※出題の都合上、本文を一部改変した。

一　破線部**ア**「折しも」、破線部**イ**「ヒエラルキー」の意味をそれぞれ書きなさい。

二　Aについて、筆者が世田谷を「セタガヤ」とカタカナで表記している理由として**最も不適切なもの**をひとつ選び、記号で答えなさい。

①　兄貴分から聞かされた「世田谷」という言葉とその漢字表記が結びつかない幼いこどもであったことを示している。

②　兄貴分から聞かされた「世田谷」の内実が分からず、あたかも未知の異国のように感じられたことを示している。

③　兄貴分から聞かされた「世田谷」というところが大いに畏怖すべき不可侵の場所だと認識されたことを示している。

④　兄貴分から聞かされた「世田谷」が単なる地名ではなく、自分とは異質の人間集団をも意味することを示している。

三　Bについて、筆者が「抽象的」な存在と表現している理由はなにか、四十字程度（句読点を含む）で説明しなさい。

四　Cについて、「ソトの大学」という表現が用いられない理由はなにか、本文に即して二十字程度（句読点を含む）で説明しなさい。

五　Dについて、中根はどういう点をさして「滑稽」と評しているのか、説明しなさい。

六　Eについて、「『ヨソ者』をどこにとるかに応じて、定位されるウチの〈場〉の位相が異なって構築され」るとはどういうことか、分かりやすく説明しなさい。

また他方で、私にとっての「ヨソ者」も、彼は彼なりの「ウチの者」のグループに属しており、また同時に彼なりの「ヨソ者」に対峙していることが想定される。そうしたウチ／ヨソ双方向からのレッテル張りによって生まれてくる〈ウチ／ヨソ関係〉の構造は、E「ヨソ者」をどこにとるかに応じて、定位されるウチの〈場〉の位相が異なって構築され、多様な社会関係の重なりを現出することとなる。これを言い換えるなら、「ヨソ者」グループへの対抗意識が生じることと、「ウチの者」の間でwe-feelingが醸し出されることは、相互作用として成立していると言うこともできよう。

以上のようにわれわれ人間の社会関係においては、水平方向のみならず垂直方向にも〈ウチ／ヨソ関係〉の枠が広がっていく可能性がある。こうした時、ウチとヨソの弁別はいかなる経緯で成立するのであろうか。前述のように、ウチとヨソとを分ける決定的な判断基準は、まずは自己を起点に誰が「ヨソ者」であるかを想定することから始まるのであろう。ヨソを漢字で「余所」「他所」と書くことが示すように、ヨソ成立の前提にはまずはウチが定位されており、ウチで〝余る所〟、ウチとは〝他の所〟がヨソとなるからである。人は自己をアイデンティファイするに際し、場面に応じてウチの枠組を取捨選択し、それに応じて自分とは異なる要素をもったヨソを意識し、F逆照射する形でウチの立ち位置を表明していると言うことであろう。

こうして見てくると、人間は、［ a ］と呼ばれる自己の価値観で囲まれた親密な領域を中心に、［ b ］とは別の価値観をもった［ c ］の領域との間の多様な関係性の中で生きていることになる。文化をway of life（生活様式）と理解するなら人間は、ウチと呼ばれる生活様式〈自文化〉と、それとは別のヨソと呼ばれる生活様式〈異文化〉との間の閾（せめ）ぎ合いの中で生きていると言い換えることができよう。かかる関係性を続ける中、人間社会の間には、「ヨソ者」の異文化に対して敵意をもった対応をする可能性が出てくることは、中根の指摘にあった通りである。自己と一体化した主体としての［ d ］という認識は、「ヨソ者」がいなくても「ウチの者」だけで何でもできるという、きわめて自己中心的な・自己完結的な意識を内包しているからである。［ e ］ではないものとして措定される多様な［ f ］に対してなされる差別の前提には、自己以外の人間存在を正統に評価しようという理解は見られず、人間社会の展開を阻害する大問題である。ここからは、［ g ］に対する意識が尖鋭化して「我執」が強くなることで、［ h ］に対する無理解・差別・排除と言った大きな断絶の構図が生み

六

五

た冷たさ〟さえもつことを指摘する。日本社会では集団の枠は〈場〉が優先されてできているので、「ウチの者」「ヨソ者」の意識が強まる結果、人は「ヨソ者」に対して非社交的になるのである。こうして中根は、日本人の人間関係の在り方を、ウチの世界しか知らない、他の世界に疎い存在であるとまとめ、「国際性のないことはおびただしい」と辛口の批判を加えることとなる。〈ウチ／ヨソ関係〉を掲げることで、中根は日本において異文化理解が疎外される要因にメスを入れたのである。

ここで中根の掲げた分析概念である〈ウチ／ヨソ関係〉を振り返ってみると、「ウチの大学」「ウチの町」「ウチの寺」……と、「ウチの」の修飾語に続く〈場〉こそが、個人が集団を構成していく際の枠となっていることが明らかになろう。そうした〈場〉は確かに、同一次元に大学・会社・町・寺など、個人が定位される所属機関が水平軸に並んで広がっているように見えよう。しかしそれらの〈場〉は同時に、それぞれ集団を構成する〈場〉の中において、更なる下位の〈場〉へと垂直方向に拡張する可能性をもっていることにも留意すべきであろう。

例えば、初めて出会った大学生達が交歓する最初期の場面を想定すれば、わかりやすい。さまざまな大学から参加があった場合、学生たちは「ウチの大学」を共通項とする同窓生としての緩やかな一体感をもって「ヨソの大学」の学生に対峙（たいじ）するであろう。しかしそこに「ウチの大学」の学生しかいなかったなら、彼らは「ウチの大学」の下部単位にある学部を意識し、それぞれの学生にとっての「ウチの学部」に基づいて「ヨソの学部」の学生と対峙するであろう。またさらに、それが「ウチの学部」の学生のみの会話場面となるなら、さらに学部の下部単位である研究室を意識して「ウチの研究室」と「ヨソの研究室」といった集団に基づく〈ウチ／ヨソ関係〉の中に自己を位置づけることとなるであろう。以上、〈場〉を大学という所属機関を事例に考えてみたのであるが、大学の〈場〉を構成する枠は、ウチの位置をどこに取るのかによって細分化されて、さらに垂直方向に〝入れ子細工〟的に連なる可能性が明らかになった。かかる〝入れ子細工〟的〈ウチ／ヨソ関係〉は、「部―課―係」といったヒエラルキーで構成される会社や役所などにおいても、また「県―市・郡―町」といった区分でなされる〈場〉を構成する枠としての地域においても、同様に確認することができるものと思われる。

『広辞苑』で「よそ」に関する解説を見ると、以下のようにある。

① ほかの所。別の所。他所。

② 直接関係のない物事や人または場所。他事。局外。また、かかわりのないこと。疎遠なこと。

この②の例文として、『広辞苑』では「よその会社の人」が上げられていることから、ここでわれわれが考えている、ウチの対義語としてのヨソは②の意味と言うことがわかる。ウチとヨソとを分ける決定的な判断基準は、まさに当事者にとっての関係性の有無に置かれているのである。そうした〈ウチ／ヨソ関係〉が次第に強く作用することによってもたらされる変化を、中根は以下のように述べ、「ウチの者」にとって「ヨソ者」は、最終的に排除の対象となる可能性を胎(はら)んでいることを明らかにする。

「ウチ」「ヨソ」の意識が強く、この感覚が尖鋭(せんえい)化してくると、まるで「ウチ」の者以外は人間ではなくなってしまうと思われるほどの極端な人間関係のコントラストが、同じ社会に見られるようになる。知らない人だったら、突き飛ばして席を獲得したその同じ人が、親しい知人(特に職場で自分より上の)に対しては、自分がどんなに疲れていても席を譲ると言った滑稽な姿がみられるのである。

「ウチの者」と言うのは、〈we-feeling(われわれ意識)〉を共有する親しみのある仲間、と言い換えることが可能であろう。あるいは、〈帰属意識〉を共有する者と言っても良いかも知れない。そうした意識が強調されることで、対内的には〈資格〉が異なるメンバー間に同一集団成員としての一体感が醸し出されることとなるが、それは同時に、対外的にはウチとは異なる「ヨソ者」グループの存在を意識し、そこへと向けた対抗意識を増大させることとなる。日本人は「ウチの者」だけの仲間グループでいると、グループ外の「ヨソ者」に対して〝冷たい態度〟をとる。もしもその相手が自分たちより劣る存在と判断したなら、「ウチの者」はさらに優越感に似た感情のもとに、「ヨソ者」に対して〝非礼の態度〟であたることになる。かかる態度が慣習として極端化した例として、中根は差別問題に見られる被差別者に対する軽蔑・疎外の態度を挙げ、「ヨソ者」に対しては〝敵意に似

四

三

として認識されているのではなく、自己と一体化した主体として認識されていることが示されている。言い換えるなら、会社や企業といった〈場〉こそが、個人のアイデンティティーの根拠となっているのである。その点から言うなら、「セタガヤの奴ら」も、地域という〈場〉によって纏(まと)められた社会集団理解に基づく言説であったということができる。

一般に使われるウチの対義語としては、おそらくソト(外)の語が挙がることが多いと思われるが、ソトではなくてヨソの日本語を立てた点は、中根の分析視座の面白さであろう。「ウチの大学」と言った時のウチは、「鬼は外、福は内」のような空間における内外の対比とは異なった、別次元のウチの意味があることを想起させてくれる。「ウチの大学」に対して、C「ソトの大学」といった表現はなされないのであるから。

ちなみに「うち」を『広辞苑(こうじえん)』第七版で引くと、三種の意味が挙がる。

① (「中」とも書く)何かを中核・規準とする、一定の限界の中。
② 自分の属する側(のもの)。
③ ものごとのあらわでない面。

これより、「ウチの大学」という時の「うち」は、②に関連するが、これはさらに以下のように説明される。

① なか。また、国内。
② 身のまわり。側近。
③ (「家」とも書く)自分の家、また、家庭。
④ (「家」とも書く)転じて、家。家屋。
⑤ 自分の夫、または妻。うちの人。うちの者。
⑥ 自分の属するもの。
⑦ 仏教で、儒教などを外とするのに対し、仏教の側のこと。

この説明からは、中根が分析概念として取り上げるウチは、⑥の他、③⑤とも関連していることが知られよう。さらに、

早足で通り抜けたのであった。その後新たな「セタガヤの奴ら」に出くわすこともなく買い物を終え、無事ノウキョウのキャンパス内に戻った時、ホッと温かい喜びに浸ったことはしっかり覚えている。ただ、今となっては何を買ったか全く思い出せない頼まれ物が入った紙包みは、汗ばむ手ですっかり湿っていた。

おそらくこの時の経験は、私が自分とは〝異質な人間〟の存在を意識した最初の機会であった。もちろん、友人と喧嘩をしたことはいくらもあって、自分と異なる、自分の思うようにならない人間がいることはわかっていた。しかし、この時感じた「セタガヤの奴ら」というのは桁違いに異質であった。自分たち「コマバの仲間」に敵対する、B抽象的かつ戦慄すべき存在であったのである。

こうした人間存在を、「ウチの者」と「ヨソ者」といったウチとヨソの対義語で整理できることを知ったのは、社会人類学者中根千枝による『タテ社会の人間関係―単一社会の理論―』を読んだ時であった。本書において彼女は、〈資格〉と〈場〉という通文化的分析概念を設定して論を展開し、日本社会の構造分析を行った。〈資格〉というのは、職業・階級・年齢・性別などといった個人の一定の質を意味するのに対し、〈場〉とは地域や所属機関など個人が集団を構成していく際の枠を意味していた。もちろん、この両者が一致して社会集団が形成される場合もあるが、多くは両者が交錯し、異なる集団を形成する。中根は、他人に対して自己を社会的に位置づける際、〈資格〉によるヨコの繋がりよりも〈場〉によるタテの繋がりを強調するところに日本人の特徴があると言う。手近な例で言うなら、「教員」「事務員」「学生」という職種は〈資格〉、「東北大学」は〈場〉であるが、「教員」「事務員」「学生」の別に拘わらず、東北大学に関わる者の多くは「東北大学の〇です」と挨拶することが通例である。

社会構造分析の枠組みから、日本社会の単一性を「タテ社会」の語で展開した本書は、出版から半世紀以上経っても色褪せないが、その前段で出てきたウチとヨソの対比も、私にとっては合点のいく新鮮な切り口であった。〈場〉を強調する日本社会の集団認識においては、自分の通う大学や住んでいる町を言い表す際に、「ウチの大学」「ウチの町」などとウチを付けて表現することが多い。かかる表現が定着している背後には、日本人にとっての大学や町が、個人がたまたま契約関係を結んでいる客体

二

国語総合・現代文B・古典B

一

Ⅰ

今を去る六十年以上前、東京の目黒区駒場町に住んでいた頃の話である。この地は、目黒区の最北端に位置する、北西方向に鋭く尖った形をした地域で、東から北を渋谷区、西を世田谷区と接していた。この町は、旧制第一高等学校の跡地である東京大学駒場キャンパスや著名な進学校など、教育機関が多数あることで知られており、当時の私は東京大学の西側に隣接した駒場小学校の一年生であった。

同級生の中には兄弟が戦中生まれの末弟もおり、時折そうした兄貴達が声をかけ、小さなわれわれも仲間に加え、徒党を組んで遊んでいた。ある時、何でも知っている憬れの兄貴分がこんなことを教えてくれた。「セタガヤの奴らには気をつけなきゃいけないぜ。あいつらは毎日一人は人を殺しているんだからな」と。当時の私が、「人を殺す」という意味をどの程度理解したかはわからない。しかしその一言により、ともかく「セタガヤの奴ら」は、危険で注意すべき怖い存在であるという認識だけはシッカリと植え付けられたのである。

ア 折しもその数日後、私は母親からお使いを頼まれた。その店は、何とセタガヤにあった。それまで母と行ったことがあって道はわかるものの、普段行かないセタガヤであったことは、数日前に聞かされた〝注意喚起情報〟に照らすなら大問題であった。行きたくはなかったお使いではあったが、私は重い気持ちで、嫌々家を出た。毎日のように遊び廻っていたノウキョウ（当時駒場にあった東京教育大学農学部の通称）の敷地を通ってキャンパスの外に出ると、いよいよセタガヤだ。見えはしない区境を越えると、その先は私にとって馴染みのない土地が広がる。母親と来た時のセタガヤの町並みは殆ど記憶に残っていなかったが、今回は違った。電柱の一本一本、生垣の木々の枝振りなどが、警戒心を持った私の目には一つ一つハッキリと映っていた。そうした時、たまたま前方から、年上の体の大きな男の子がこっちに向かって歩いてきた。マズイッ！と思った私の緊張感は極限まで高まり、ともかくその子と目を合わさずに、彼とは反対側の道の端を、極力目立たないよう、でありながら

令和４年度入学試験　　小論文「出題意図」

（入試情報公開用）

人間発達文化学類　一般入試　前期日程
教育実践コース、心理学・幼児教育コース、人文科学コース

文章の理解力，文章から論理を構築する思考力，広く社会に対する日常的な問題意識，そしてそれらを基にして的確に表現する力を見ると同時に，記述した内容と形式から，人間の発達を将来支援する際に必要な資質や適格性を総合的に判断します。

令和４年度入学試験　　小論文「出題意図」

（入試情報公開用）

人間発達文化学類　一般選抜　前期日程

特別支援・生活科学コース

受験生の基礎学力（読解力，思考力，理解力，論理性，文章構成力など）とコースへの適性，及び特別支援教育や生活科学に対する意識や関心を把握するため，文章読解及び文章作成の課題を設定して，以下の視点で受験生の力量をはかる。

問１では，資料の内容を正確に読み取り，規定の字数内で的確に説明するという観点から，基礎的読解力及び理解力をみる。

問２では，図の内容を正確に読み取り，規定の字数内で的確に要約するという観点から，基礎的読解力及び理解力をみる。

問３では，資料全体の内容をふまえ，自らの考えを的確に論じているかという観点から，思考力，文章構成力，論理性などを総合的に判断する。